

申請者領域・氏名	脳神経外科学領域脳血管障害学 ・ 飛嶋 華
指導教授氏名	大熊 洋揮
論文審査担当者	主 査 蔵田 潔 副 査 上野 伸哉 東海林 幹夫
<p>(論文題目) Relation between the persistence of an abnormal muscle response and the long term clinical course after microvascular decompression for hemifacial spasm. (片側顔面痙攣に対する微小血管減圧術における異常筋電図の残存と長期的な臨床経過の関連性)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>片側顔面痙攣は主に眼輪筋からはじまり、次第に口輪筋にも波及する不随意の反復的収縮を示す疾患であり、脳幹の顔面神経起始部に隣接する動脈からの圧迫によって生じることが原因の大半を占めている。この治療として、原因となる血管の走行を変化させ圧迫を解除する微小血管減圧術が行われている。本研究は、微小血管減圧術が異常筋電図反応にどのような影響を与えるかを調べるため、手術中に微小血管減圧を行う前後に顔面神経刺激による筋電図を用いて手術の効果を検討するとともに、術後5年間の治療成績を術中の筋電図応答にもとづく2群で定量的に比較したものである。</p> <p>微小血管減圧術を行う直前に眼輪筋を支配する顔面神経分枝を電気刺激すると、顔面神経の別の分枝に支配されているオトガイ筋から筋電図反応が観察され、これを異常筋電図反応 (abnormal muscle response, AMR) と呼んだ。多くの症例では AMR は微小血管減圧術後に消失し、かつ痙攣も消失した場合がほとんどであったが、一部の症例では AMR は残存し、痙攣も消失しない場合が多かった。この差は統計学的に有意であった。しかし、1年後には AMR 残存群の大半でも痙攣が消失し、AMR 消失群と優位な差が認められなかった。</p> <p>これらの結果は筋電図反応が手術直後の予後を判定するのに有用であることを示すとともに、長期にわたる治療成績を定量的に判定した点を学問的に新しく有用な点としている。また、申請者本人の研究への主体的関与も確認できたので、筆頭著者としての資格は十分である。従って本論文は学位授与に値する。</p>	
公表雑誌名	Neurologia medico-chirurgica